

マイノリティが メインストリームに。 「老大国」は、 より成熟した

いりえ あつひこ
入江敦彦
エッセイスト

イギリスは屈託ない子ども時代から
思慮深い大人に成長した

たぶん、いま、イギリスは世界中のどの国よりも元気がいい。かつての「老大国」は、まるでタイムトンネルを潜りぬけたように、すっかり若返ってしまった。が、印象はどうあれ、この表現は適切ではない。実際のところこの国は、より成熟したのである。

不出来な個体が苦難を経てドラマティックに変態を遂げる様をして、「みにくいアヒルの子」や「蝸から蝶」の比喻もあるが、それでもちよつと誤解を招くおそれがある。だが、こんなふうないうことは可能だろう。イギリスは屈託なく豊かさを謳歌する子ども時代から、暗い青春期の苦悩を乗り越えて、

思慮深い大人に成長したのだ、と。

豊かな国、美しい国と誰かがいうとき、資本主義原則に支配された現代では、とりもなおさず物質的に恵まれた国を意味する。だが子どもがタダをこねていくら大量に玩具を所有したからといって、それは物質的に恵まれているといえるだろうか。たとえその玩具が高価なものだったとしても。

エネルギーがありあまって無闇と走り回り暴れまぐる子どもは、確かに元気がいいと表現される。しかし、彼らには重い荷物を運ぶ筋力や、長距離移動するための持久力はない。ペース配分もできない。同じだけの仕事をこなしたあとで元気がいいといえるのは子どもか大人か？ 考えるまでもなからう。イギリスが好況に沸く原因は、不況



キングスクロスの新しいユーロスター発着駅風景。EUとの“出会い”も英国に活力を与えた

撮影：筆者（特記以外同じ）

のさなかに思考を怠らなかつたことに尽きる。経済復活のステップボードとなった90年代初頭の公営企業民営化と金融市場自由化の鮮やかな転換、そしてコンピュータ導入によるシステムの一新。英国が世界に先駆けて、それらの英断に踏み切れたのは、過去を振り返ることなく試行錯誤を続けてきた結果である。

この政策はむろんさまざまな問題も伴った。が、およそ30年に及んだ苦難の季節につくり上げた、かの有名な「ゆりかごから墓場まで」というシステムが人々の暮らしに及ぶ衝撃を和らげた。政府の移民受け入れ方針は物議をかももしましたけれど、確実に新しい活力となつて好景気の牽引力となった。天下りを根絶し、若い芽を大切に育て



いりえ あつひこ ● 京都生まれ。MICHIKO LONDONのコーディネーターを経て1993年に渡英。著書に『英国映画で夜明けまで』『英国式人生のススメ』『ゲイ・マネーが英国経済を支える!?』ほか。『イクズの構造』など京都を材に取った作品も多い



ロンドンの金融街シティにそびえる保険会社Swiss Reのロンドン本部ビル。設計はノーマン・フォスター

る風潮が改革を妨げる旧弊な価値観を打破した。

つまりは大英帝国の栄光という幻想を忘れ、固執を捨てたところから、すべては始まったのであった。過ぎ去った幸せを追い求めているうちは、けっして次の恋はできない。と、つまりはそういうことなのだ。

伝統に自信があるからこそ革新に手を染められる

先ごろ、ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館が、かの有名なローリング・ストーンズの舌出しロゴのオリジナル・アートワークを約1000

万円で購入した。デザイナーの名はジョン・パッシェ。アンディ・ウォーホルだとばかり思っていた私は大いに驚いたものだ。驚きませんでした？

レコード会社が用意したロゴを不服としたミック・ジャガーが自ら発掘してきた彼は、その70年当時、まだ学生。受け取った報酬は1万円であった。パッシェはそののち、ポール・マッカートニーをはじめ、錚々たるアーティストと組み、イギリスを代表するアートディレクターとなっていく。

この話は一見、アメリカンドリーム的なサクセスストーリーのように感じられる。けれど、実はとても英国的な

エピソードである。彼らの権威や名声に惑わされない性質がよく表れている。権威や名声を有する者ほど、その傾向が顕著である。ストーンズがアメリカのバンドだったら、あのロゴは生まれていないかウォールホール作だったろう。

イギリスに住む人々は「伝統を大切にすると考えられている。それは間違ではない。けれど正しくは「伝統に自信がある」といべきだろう。それゆえ伝統に固執することなく革新に手を染められる。そして、それが新たな伝統として育っていくと信じている。かくて舌出しロゴは1000万になった。王室まで笑いのネタにしてしまった

『モンティ・パイソン』の出現。パンクファッションから出発してヴォーグの表紙を飾るようになった「ヴィヴィアン・ウエストウッド」。金融街シティに異様なSwiss Reタワーを屹立させた建築家ノーマン・フォスターの仕事。みんなそんな性格の発露だ。

それは、いわばノンブランド主義。ものごとの価値を自分で見定めようとする意思。

そういえば、イギリスには「流行」というものがない。みなが同じ色の服を着るとか、同じ映画を観に行くといっ



都心の心臓部SOHO。ピカデリーサーカスからリージェント街を臨む。この一大ショッピングエリアは、ゲイパレードのコースでもある

た現象はまず起こらない。個人個人が自分の嗜好をよく知っているからだ。だからこそ、いちど広い人気を獲得したら消えることなく、一定のファン層を維持する。それが伝統の国の正体である。人種の坩堝(くわく)という言葉があるけれど、イギリスは嗜好の坩堝だ。それも互いに溶け合わず個を保ったまま、ぶつかりあい、火花を散らし熱を帯びていく。これこそ伝統となるだけの力を持つ革新的の誕生する土壌なのだ。

英国のLGBTコミュニティは年間18兆円の市場を形成する

「あきらめるな。しかし期待するな」それがイギリスに住むようになって最初に覚えた処世訓であった。どんなに努力しても望んでも「どうにもならん」ことが世の中にはある。だからといって、ハナから投げ出しては何も始まらない。できるだけのことを精一杯やるしかない。この国は数々の苦い体験を通して、そんなことを教えてくれた。日本で流行の「願えば叶う」なんて台詞を彼らに聞かせたら、きつと鼻で笑われてしまう。願うだけで何でも思い通りになるなら太陽は西から昇るし、トラファルガー広場のウザい鳩は明日

にも消えてくれるだろうさ、と。だが、現在のイギリスには太陽を西から昇らせるに等しい願いを叶えてしまった人々がいる。ほんの一番前まで彼らは社会から「二流市民」扱いされ、そのアイデンティティを笑われ蔑まれてきた。それがいまや、英国経済を担う最大の稼ぎ手であり、消費者となつてし

まったのだ。その名をLGBTという。レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー、その頭文字の組み合わせがLGBT。いわば同性愛者たちである。マイノリティであるはずの彼らが、なんと現代のイギリスでは年間に18兆円もの市場を形成するコミュニティになっているのだ。



「ゲイ・プライド」のパレードの終結地となったトラファルガー広場。同性愛者たちで立錫の余地もない



「ゲイ・プライド」のパレードの先頭に立つロンドン市長

いかにして彼らがそれだけの経済的パワーを持つに至ったかは、拙著『ゲイ・マナーが英国経済を支える!』を参照されたい。とまれゲイ雑誌にホンダやヴァージン、パークレー銀行などの一流企業が広告を掲載し、警察や陸海空軍にもゲイグループが存在するという現状がすべてを物語っている。

とうてい不可能と本人たちですら考えていた同性婚までも成立させてしまったのは、期待せず、しかし、あきらめず社会の偏見や迫害と彼らが戦ってきた結果である。もつとも、そのポテンシャルが認知されていなければ、ブレア内閣が発足時に4人もの同性愛者の閣僚を擁することもなかったろう。彼らの存在感が目に見える形で理解

できるテクストのひとつに、毎年夏恒例の「ゲイ・プライド」がある。英国大使館の観光客向けイベントカレンダーにも掲載される同性愛者たちの祭典だ。そのパレードの先頭にはロンドン市長が立ち、08年は82万5000人（警視庁発表）が参加した。

パレードの終結地はトラファルガー広場。同性愛者たちの群れで立錐の余地もない。鳩の数よりも多い。私は今年、ここで驚くべき光景を見た。広場に面したセント・ジェームス教会に、LGBTのシンボルである虹色の旗が掲揚されていたのだ。キリスト教はゲイの人権運動を阻む積年の敵。それが彼らを容認する態度を示したのである。まさにフランス革命の日に、バステイ

ーユに翻った白旗。いや、それこそ西から昇るお日様だ。イギリスにおける彼らの勢いは、まだまだ衰えそうにない。

「異なる他者の存在を認める」ことが「経済的豊饒への確実な道」でもある。ただ誤解してほしくないのだが、私はゲイがいるからイギリスは豊かになったのだと言いたいわけではない。むしろ18兆円は大金だし、彼らが好景気に貢献しているのは間違いない。けれ

ど、ポイントはこの国が行き着いたもつと根源的な哲学にある。

同性愛者に代表される「異なる他者の存在を認める」ことが、「性別や人種、年齢などによる差別を認めない」という理想に繋がると、現代英国人たちは考えている。そして、そんな社会のあり方が経済的豊饒への確実な道でもあるのではないかと。それがこんちのイギリスの健康的な市場を支えているのだ。

例えば、同性愛者以上にマイノリティとしての苦難を味わっている身体障害者たち。彼らへの支援もまた大切な人的資源の育成だとイギリスでは判断されている。ただの道徳的・社会的な保障行為ではないのである。

いいサンプルが北京パラリンピックで英国選手団が残した輝かしい成果である。オリンピックでもイギリスはメダル獲得数で中、米、露に次いで大健闘したけれど、パラリンピックでは堂々の2位。人口比で計算すれば実質的にはナンバーワンではなからうか。

アテネ五輪で日本が過去最多のメダル数を獲得したとき、その経済波及効果は1兆円に迫ると推計されていた。今大会では陸上のウサイン・稲妻がボ



セント・ジェームス教会に掲揚された同性愛者たちのシンボルの虹色の旗

ルト選手の活躍が、今後ジャマイカの「国おこし」の中核を担うのではないかと期待されているという。

パラリンピックが五輪同様に報道されるイギリスでは、自転車競技で4個の金をもぎ取ったダレン・ケニー選手や、2個の金に輝く水泳のエレノア・シモンズ選手はもはやスターである。彼らは同じ障害に悩む人々を勇気づけるだけでなく、立派に市場を潤す役割を果たしている。

もうイギリスではマイノリティは被害者でも庇護されるべき弱者でもない。「願えば叶う」にすぎない受身の存在ではない。「やればできる!」と信じ、現実に利益をもたらすメインストーリーのランナーなのだ。

イギリスの水泳選手。パラリンピックで2個の金メダルを獲得した水泳のエレノア・シモンズ選手(中央)。左はオリンピックで2個の金メダルを獲得したレベッカ・アドリントン選手、右はパラリンピックに3大会出場して計11個のメダルを獲得したマット・ウォーカー選手。2008年10月16日、ロンドンで開かれたイギリス選手団による「オリンピック・パレード」にて

写真提供: AFP=時事

花も実もある英国産ビューティーには自然体へのこだわりがある

「イギリス」と「美人」は相性が悪い(笑)。実際に町を歩いていても、イタリアやフランス、スペインみたいにハツとするきれいだころに出会える確率は低い(失礼)。しかしその実、英国人女性には不思議な人気がある。いったい何が世の男心を惑わせるのだろうか。現代英国を代表する美人女優といえばキーラ・ナイトレイ。『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズで世界的なアイドルになった。演技力にも定評があり『プライドと偏見』では弱冠20歳にしてオスカーにノミネートされた。顔だけ見ると非の打ち所がない彼女だが、

その体形は完璧とは言い難い。しばしば拒食症だと噂されて本人は「立腹だけれど、それもムベなるかなである。」

ナイトレイは、最新作『The Duchess』で、胸開きドレス姿の写真のバストを少し大きく修正することを提案されたが断固拒否したという。「そりゃあ、もつとあればいいと思うけど、無理な話だもの。だから自然がいちばんいい」と彼女は言ったそうである。この豊胸手術全盛の時代にあつて、若き美人女優の信念は些かも揺るぎがない。

ほかにも美しいといえ

ば『ナイロビの蜂』でオスカー助演女優賞を受けたレイチエル・ワイズや、『イン・アメリカ』で主演

女優賞候補になったサマンサ・モートンらがいる。彼女らはナイトレイとは逆に、標準的ハリウッド・ビューティーに比べるとかなりふくよかな体つきだ。けれど「痩せるためにおいしい食事をあきらめるなんて真っ平」らしい。おそらく英国女性の魅力の根源には、そんな自然体へのこだわりがある。人工的なマネキン美人への拒絶感が彼女ら

女優のキーラ・ナイトレイ。2008年9月7日、カナダのトロント国際映画祭で上映された『The Duchess』の舞台挨拶に現れた

写真提供: EPA=時事

を人間らしく美しく見せているのだ。美の大敵である「老い」に直面しても彼女らは毅然と立ち向かう。ついには07年の『クイーン』で栄冠を手にしたオスカー女優のヘレン・ミレン。63歳にして輝かんばかりの彼女だが、「修正」にはまったく興味がないと語る。数多いヒット作のひとつに『カレンダール』がある。

英国中部の農村に暮らす普通のオバサンたちが、チャリティを目的にヌードカレンダーを製作して大成功を収めるコメディだ。このなかで死んでいく夫が妻に残した詩が紹介される。彼は自分の妻たちを向日葵に喩え「咲き誇る花は見事だけれど、ヨークシャーの花はその終わりがそが美しい」と称える。

美人とは道理の解った男の産物かもしれない。

「もはや本業においっしょー」
真に英国的な料理が誕生した

ロンドン近郊、メイデンヘッドにそれはある。「Fat Duck」。もちろんミシュランの3ツ星は貰っている。けれどブローの料理関係者が投票する「世界一の

レストラン」にスペインの「エルブジ」を抑え、イギリスの、それもテムズ川上流の地味な小都市にある店が選ばれた。英国人もびっくりの椿事であった。シェフのヘストン・ブルームンタールは、いわゆる「再構築派」の料理人。既存の味覚を素材の一つひとつにまで解体し、それを組み立てなおして新たな食の快楽を導き出す。それを経験則



ロンドン近郊のメイデンヘッドにある3ツ星レストラン「Fat Duck」。液体窒素で凍らせる新しい味のクリエーション

や勘所でやっつけるのではなく、あくまで彼は科学的に生理学的にアプローチしてみせる。全21皿に及ぶメニューは知的興奮に満ちている。

料理人というのは芸術家、あるいは職人である。美食の誉れ高いフレンチ、和食、中華、いずれも例外はない。が、ブルーメンタールは違う。真に英国的

でおいしいオリジナルの英国料理が、いまここに初めて誕生した。

「なんちゃってジャパニズム」が
いまでは少し懐かしい

最初は「レッド・オア・デッド」が発表した日本企業のトレードマークをパロディ化したコレクションだったと思う。80年代後半から変な漢字やカタカナが胸に踊るTシャツがイギリスを席巻した。

彼らはそれを文字ではなく「絵」として認識していた。英国人にとって日本、いや日本の文化は当時、まだ「わけのわからないエスニック」でしかなかったのだ。呪術的なハイテクの国——それがジバンゴであった。

けれど、くだんの偽日本語Tシャツが目だたなくなるにつれて、イギリスにも正確な日本のイメージが浸透してきた。街を歩けば「サムライ」「衣」といった文字が軒先に並び、スーパーでは海苔やワサビが普通に買える。

誤解が解けて喜ばしいことではあるのだらう。けれど化粧品に「急須」、スナック菓자에「ミカド」なんて名前をつけていた時代が少し懐かしい。「美しい誤解」は魔法のようなものだから。☺



洋服のレーベルにも美しい日本の漢字がしばしば使われる